

東南アジアの国が好きで国際保健の仕事をしています

おかばやし ひろのり  
**岡林 広哲**

国際医療協力局  
運営企画部・保健医療開発課  
医師



★略 歴

- 1996年 慶應義塾大学医学部卒業、武蔵野赤十字病院研修医
- 1998年 慶應義塾大学医学部小児科学教室入局
- 2002年 JICAカンボジア 母子保健プロジェクト（短期専門家）
- 2003年 JICAタイ 国際寄生虫対策アジアセンタープロジェクト（長期専門家）
- 2005年 国立国際医療研究センター国際医療協力局入職  
JICA長期専門家：ラオス（2005-08年、2010-13年、2019-23年）  
海外出向：WHOラオス事務所母子保健・医療の質と安全担当技官（2023年～）  
国内出向：厚生労働省（2013-14年）、日本医療研究開発機構（2015-16年）  
その他：東京医科歯科大学医療管理政策学コース修了（2019年）

★現在の主な担当業務

- ・母子保健、保健医療サービスの質、医療保障制度、国際保健政策

——— 岡林さんが、医療職・国際協力を目指したきっかけを教えてください。

小さい頃から生き物全般が好きで、生物の勉強をしたいと思っていたのですが、高校が大学の付属高校だったため、その大学の学部の中で生物が一番近そうな学部ということで、医学部を選びました。そんな理由だったので、最初は臨床ではなく基礎医学に進むつもりでした。

大学2年生の頃から、開発途上国をバックパッカースタイルで旅行するようになったのですが、東南アジアが好きになり、いつか東南アジアに住んでみたいと思うようになりました。大学4年生とき、自由研究のカリキュラムがあったのですが、開発途上国に関する研究をしようと思い、熱帯医学寄生虫学教室を選びました。研究室には、国際保健の仕事をしている先生方もいて、そうした先生方とお話しているうちに国際保健の仕事に興味を持つようになりました。それから、国際保健関係の勉強会や交流会に参加するようになり、交流会で出会ったミャンマー人の小児科の先生をたずねてミャンマーに行ったことが、小児科医になって開発途上国で働きたいと思うきっかけとなりました。

——— 国際医療協力局に入職する前はどのようなキャリアを積まれていたんですか。

大学卒業後は数年間小児科の臨床をしていましたが、専門医の取得を区切りとして、国際協力の仕事を開始しました。

きっかけは、たまたま参加した国際保健の勉強会で、JICAカンボジアの母子保健プロジェクトの短期専門家の仕事を持ちかけられたことでした。カンボジアで短期専門家として働いているときに、今度は大学生の頃に通った研究室の教授から、JICAタイの寄生虫対策プロジェクトの長期専門家のお話をいただき、タイで働くことになりました。

——— 国際医療協力局に入局したきっかけ、理由を教えてください。

JICAタイの寄生虫対策プロジェクトで働いているときに、当時の国際医療協力局の課長から今後も国際協力の仕事を続けるのであれば、国際医療協力局に来ないかとお話をいただき、タイから帰国後、国際医療協力局に入職しました。

2005年6月に入職したのですが、3か月後の9月にはJICAラオスの母子保健プロジェクトの長期専門家として派遣されることになりました。3年後の2008年にラオスから帰国したのですが、帰国後はラオスと他の国を毎月交互に出張する生活が続き、2010年に再びJICAラオスの母子保健プロジェクトの長期専門家として派遣されました。



ラオス母子保健プロジェクトのカウンターパートと



保健セクターワーキンググループ会議

2013年にラオスから帰国し、すぐに厚生労働省へ、その後、日本医療研究開発機構に出向しました。厚生労働省への出向は1年間だけでしたが、出向をきっかけに、その後数年間、WHO総会、執行理事会、地域委員会へ日本代表団の一員として出席を続けました。WHOの会議の準備や出席を通じて、国際保健の最上流の動きを知ることができ、現場レベルだけでなく、グローバルな視点からも国際保健を捉えられるようになりました。また、厚生労働省への出向では、お役所の仕事の進め方を学ぶことができ、その後の業務に大いに役立っています。



WHO総会で発言中

2019年にJICAラオスの保健政策アドバイザーとして再び長期派遣となりましたが、この派遣では、厚生労働省やWHO会議関連の業務での経験がとても役立ちました。保健政策アドバイザーとしての仕事は2023年6月で終了したのですが、7月からは、WHOラオスの母子保健・医療の質と安全担当技官として働くことになりました。



カウンターパートとともに国際会議に出席

——— 今後はどのような展望、夢をお持ちですか。

カンボジアの新生児室で新生児医療について現地の医療従事者を指導する仕事から始まり、少しずつ業務範囲が広がっていき、日本、海外で様々な経験を積んできましたが、海外の現場で事業を実施する業務が自分には一番合っていると思います。グローバルな動きを押さえつつ、現地の政府方針、他の開発パートナーの動き、自分が働く機関の特徴を踏まえた、より効果的な事業実施について、若い世代に伝えていければと思います。

——— 最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

国際保健の仕事をはじめて20年以上が過ぎましたが、これまで、いろいろな仕事に関わってきました。ひとくちに国際保健といっても、いろいろななかかわり方があります。いろいろな経験を積むことで、自分のできる業務の幅が広がると思いますので、いろいろな仕事にチャレンジしてみることをおすすめします。ただ、海外は日本と文化も環境も違いますので、自分に合わない場所では無理をせず、ここが好きだなんて思える国で働けると、多少仕事が大変でも続けられるのではないかと思います。



——— ありがとうございました。